

## 秋のススキ草原



秋のススキ草原

文と写真◎小山 明日香 Koyama Asuka

生物多様性・気候変動研究拠点

## 秋

になりました。秋というと、紅葉したカエデやイチョウに加え、黄金色にたなびくススキ草原を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。日本のススキ草原の多くは、早春におこなわれる伝統的な火入れ（野焼きや山焼き）や採草（草刈り）など、人による利用や管理によって維持されてきました。このような場所を「平自然草原」といい、人の介入がなければやがて樹木が定着します。ススキ草原は日本全国に分布し、地域の固有種をふくむ多様な動植物が生息しています。

## 深

秋のススキ草原は黄金色一色ですが、2カ月ほど早く訪れると秋の七草として知られるヤマハギ（マメ科）、オミナエシ（スイカズラ科）、キキョウ（キキョウ科）をはじめ色とりどりの秋咲きの花が見られるでしょう。冬を越し、火入れが終わったあとの春には、黒く焼けた地面にミツバツチグリ（バラ科）が黄色い花をつけ、緑が一斉に芽吹きます。

## か

つて草原の野草は、牛馬の飼葉や屋根のカヤ葺き、田畑の堆肥などに広く使われていました。明治期には国土の約14%を占めていたと考えられています。近代化以降はこれらの需要が急速に低下し、長らく草原であった場所の多くは住宅地、農地、植林地などに変わり、草原は国土の1%未満にまで減少しました。近年まで管理が続けられてきたススキ草原でも、土地所有者の高齢化や人手不足により管理放棄が進み、希少な動植物の絶滅が危惧されています。

## 哀

秋を誘う秋の空とススキの穂。かつてここに広がっていた人々の暮らしと動植物の営みに思いを馳せ、これからの草原のあり方を考えてみませんか。



## 初秋の草原に咲く植物

上段左から：マルバハギ、キキョウ、シラヤマギク  
下段：オケラ、マツムシソウ

火入れ後に花を咲かせる  
ミツバツチグリ